

会員のひろば

北海道医報では、特定の個人・団体を誹謗、中傷する内容等を除いた幅広い多様性のあるご意見を掲載させていただいております。

続・懐かしい言葉

札幌医科大学医師会

うらさわ しょうぞう
浦澤 正三

以前本誌に、昭和10年代、若い使用人を雇い青果物業を営んでいた父、その父と共に働いていた母が口にしたユニークな言葉使いを「懐かしい言葉」と題し投稿したことがある（2019年4月1日付、1207号、会員のひろば）。当時のわが家の生活は、外働き（注文取り・集金担当）の父よりも若い衆（家での力仕事、配達・注文取り担当）と共に働き家事を切り盛りする母を中心に回っていた。懐かしい母の言葉の思い出を再度綴ってみた。

商人の家で飛び交う言葉は当然のことながらお金に関するものが多い。「金は天下の回りもの」で、集金したお金は次の仕入れに用いられ右から左へと移動する“お足”であって、銀行はお金を預けるところではなく借りるところでした。「爪に火を点す（ような）」とまでではないにしても子供の目に家は貧乏に見え、常に「金欠病」で“ピーピー”していました。しかし、単なる“けち”とは違い、お金の使い方に関する父との会話では、「安物買いの銭失い」、「タダほど高いものはない」、「損して得取れ」などの言葉が耳に入ることもあり、子供達は「いつまでもあると思うな親と金」と言われて育ちました。私も「口銭（仲立ち手数料）」や少額の賄賂を意味する「鼻葉をかがせる」、「鼻葉をきかす」などの意味、値引きを意味する「勉強をしておきます」（お客相手）や「色をつける」（商人同志）などの意味を幼時から理解していたように思います。

戦時中の食糧難で食事さえも満足に食べられなかった時代、たまに焼いたスルメイカを裂いて腹を空かした子供達に与えながらの、「口寂しいだろうから」「腹の虫押さえに」などの言葉も、母以外からはほとんど聞いたことがない懐かしい言葉です。粗食なりに腹いっぱい食べると直ぐにひっくり返って寝てしまう子供達を、「食べて直ぐ寝ると牛になる」、「腹の皮つっぱると目の皮弛む」と笑っていました。時に半ば凍った売り物のミカン2、3個を貰って銭湯に出掛け、帰って暖かいミカンを食べるのも

楽しみでした。空腹の思い出は限りがなく以前にもあちこちで書いたことがあります。

子供に対する戒めの言葉も多く、「千里の道も一歩から」、「嘘は泥棒の始まり」、「楽あれば苦あり、苦あれば楽あり」、「立つ鳥跡を濁さず」、「急いては事を仕損じる」もよく聞かされました。

人物評価に類する、「淵に波立たず」、「海千山千」（ずるがしこいこと・人）、「酸いも甘いも弁えた」、「蛇の道は蛇」（が知っている）があり、人には「外面と内面」がありお前は「内弁慶の外味噌」だと言われました。「親ばかチャンリン」（子に甘い親）、「馬鹿の一つ覚え」、「馬鹿と鉄は使しよう」、「馬鹿も休み休み言え」など、今では差別用語とみなされる言葉も必ずしも悪い意味ではなかったようです。

父との会話では、商売や世渡り術として「嘘も方便」、「よらば大樹の陰」、「長いものには巻かれろ」と言い、「明けない夜はない」、「待てば海路の日和あり」、「運否天賦」（天に任せて運だけで生きてゆく）と慰めることもありました。

母と2人の姉たちとの会話も懐かしい。姉たちが「この頃、〇〇（故郷の親戚）から便りが無いね」などと言うと、母は必ず「便りのないのは良い便り」と返します。「あずましい」は新潟の方言でしょうか、他所ではほとんど聞かない言葉で、窮屈な席から帰り着物の帯を解くと、「ああ あずましい」（ゆったりする、心地よい）の言葉が出ます。「男寡に蛆が湧く」は、独り者・離婚した男性が話題になった時の母の枕言葉です。

好まない客の来訪が予想されると、客の早々の退散を願う「逆さ箒」のお呪いがあります。室内掃除用の柄の長い箒を逆さに立て、頭の部分を手拭で覆って、客の目につかない台所の壁に立て掛けるのです。実際、年1回訪ねて来ては1泊していく、本州の卸売り問屋の番頭さんを嫌って、母が箒を立てるのを何度か見ました。また姉たちも、訪れた家で歓迎されないような態度をとられた時には、大袈裟に「箒を立てられた」とよく言っていました。

最後は母の幼時の思い出の言葉です。母の小学校入学前には札幌にもあちこちにアイヌの人たちが住んでいました。近所に住む気さくなアイヌの小母さんは、「1里行ってもコーシェ、2里行ってもコーシェ。コーシェコーシェもトートモシェ、チンケにコショチケテタ（1里行っても臭い、2里行っても臭い。臭い、臭いも道理、鼻の頭に糞付けてた、の意味でしょうか?）」と言って母を笑わせたそうです。また、商いの最初に「はじめー」と言い、最後に「おわりー」と言って数を水増しする日本の商売人のことを、「シャモ（倭人）の始めと終りが無ければなー」とよく口説いていたと聞きました。

北海道は元々アイヌが住んでいた土地。私の子供時代には、家から大通り公園に向かう途中に道路側が総ガラス張りの“アイヌの木彫”の店兼工場があり、数人の職人と家族の働く姿を見掛けました。また、私の小学校2、3年生の頃には、アイヌのシャクシャイン首長のこと、開拓時代の人食いクマのことなどを書いた北海道小学郷土読本という副読本がありました。書き言葉を持たず歴史的記録が乏しかったせいでしょうか、今に至るまでその存在と文化が正に評価されていないのが残念です。